

割れさせない左官シリーズ①

割れさせない左官・漆喰壁 (石膏ボード下地)

(有)ますいいリビングカンパニー
代表 増井 真也

現代の住まいに左官仕上げを取り入れる際、従来通りのやり方では上手くいかないケースが出てくる。そこで本シリーズでは、左官を積極的に取り入れた設計を行う工務店・(有)ますいいリビングカンパニー代表の増井真也氏より「割れさせない左官」をテーマに執筆を頂く。第一稿は「石膏ボード下地への漆喰塗り」を取り上げる。
(編集部)

はじめに

「左官はいいよね」、結構多くの人がこう言ってくれる。でも、それと同じくらいに多くの人が、「でも左官は割れるからね、外壁はサイディング、内装はビニルクロスの方がいいわ」となってしまう。日本の街並みは、こうしてレンガ風、吹き付け風のようなフェイクが溢れ、建築内部はどこも同じようなクロスに囲まれるようになった。現に僕も、これまで工務店経営者として数々の左官を設計に取り入れてきたが、モルタルや漆喰の仕上げは、どうしても割れることが避けられないと考えていた。そして、たくさんのひび割れを作ってきてしまった。でも本当にどうしようもないのか、割れにくくすることはできるのではないかという思いは捨てきれない。

左官の研究を始めて多くの腕の良い左官職人に会うと、割れない左官があることに気がつく。「どうすれば割れないのか」を聞いてみると、皆一様に、ニヤッと笑ってから、自らの工夫を話してくれる。そう、割れさせない工夫というのは、料理でいう隠し味、職人の魂のようなものなのだ。そこで、様々な左官職人がひび割れない左官仕上げのために行っている工夫を取材し、全国の左官職人の参考にすべく示したいと考えこの記事を投稿する。気候の差や、地域ごとの素材の差などがあると思うが、皆様の参考に

していただきたい。

石膏ボード下地への漆喰仕上げ

今回の取材では、愛知県名古屋市にある左官屋さんを訪問した。ヒアリングをした構法は二つ。一つは石膏ボード下地への漆喰仕上げである。

おそらく、石膏ボード下地への既調合漆喰仕上げというのは、現代の住宅において最も多く用いられている工法ではないだろうか。特に、昨今の新築やリフォームの町丁場の現場では、多くの施工がなされているし、多くの問題も起きていると思う。一般に漆喰というと、消石灰と麻すさ、そしてつまたや黒銀杏草などを煮て作る焚き糊を混練した本漆喰と、それに類するもので、糊を焚く手間を省いて粉つまたを使用する粉糊漆喰、そして様々なメーカーが発売している既調合漆喰がある。今回は、これらを全てまとめて、石膏ボード下地への漆喰薄塗り仕上げについて言及する。

ちなみに、既調合漆喰は日本漆喰協会の定義に、以下のように示されている。

消石灰を主原料とし、のり、繊維、無機質骨材、有機質添加物などを製造工場において調合、加工したプレミック製品。

- 1)既調合漆喰の性状は、粉末状またはクリーム(練り物)状である。
- 2)既調合漆喰の組成

主原料である消石灰は、ドライベース換算で全重量の、上塗り用は50wt%以上、中塗り用は30wt%以上含有しなければならない。

などと定められている。ここにはない項目は、各社が施工しやすいようにさまざまな工夫を施しているということなので、概して施工がしやすいものが多い。素人向けのDIY製